平成4年（1992年）8月10日　教皇様の声　（昭和59年10月1日第三種郵便物認可）
8　AUGUST,1992　毎月10日発行　第148号

教皇様の声

日常生活における聖性

（去る五月十八日、多数の巡礼者が世界中から聖ペトロ広場に集い、オプス・デイのプレラートゥス、アルバロ・デル・ポルティーリョ司教司式の感謝ミサに参加した。巡礼者は聖体祭儀の後に教皇様との謁見に参列した。）

1　オプス・デイのプレラートゥス、アルバロ・デル・ポルティーリョ司教が、ここ聖ペトロ広場に集まった信者と協力者と友人の名において表明された私に対する子としての深い愛情に心から感謝します。デル・ポルティーリョ司教ご自身に衷心より挨拶を送ると同時に、同じ挨拶をここにおいでになる司教方及びその他の方々にも送ります。

ホセマリア・エスクリバー・デ・バラゲル神父が列福され、皆さんは喜びに満たされておられます。なぜなら、オプス・デイのプレラートゥスが先ほど言われたように、エスクリバーが祭壇上に上げられたことは、教会にとって益するところがまことに大きいからです。私もそう信じています。事実、「信徒の召命と使命」に書いたように、「神の民全員、特に信徒は、日常生活の中で実践された、聖性の新しい模範と英雄的な徳のあかしを見出すことができる」（十七番）と私は確信しています。福者ホセマリア・エスクリバーのうちに、日常の仕事におけるキリスト教的な英雄性の卓越した証人を見ない人はいないでしょう。

聖性と使徒職への普遍的召命は、ご存じのように第二バチカン公会議の教導職が強調した点の一つです。（教会憲章・四〇～四二番、信徒使徒職に関する教令・一～四番参照）　福者ホセマリアは彼に先立つ人々と同じく神の光を受けて、この普遍的な召命を、とくに信徒信者の間で教え、広めるべき教説としてのみならず、何にもまして自らの司牧を通して果すべき責務として理解していました。若い司祭ホセマリアは困難の山積みする環境にありながらも、神の恩寵には物惜しみせぬ寛大さで応えました。その忠実は聖霊の働きを容易にし、ホセマリアは神との個人的な一致の高みに導かれました。そしてそれは驚くほど豊かな使徒職の実を結んだのです。事実、神はすでに初期の頃から使徒職の慰めに満ちた実りをお見せになりました。しかし、ホセマリアはその実りをすべて神の寛容と優しさに帰していました。そして、自らを「不器用で耳の聞こえない道具」と考えていたのです。これこそ、実にホセマリアのまことに深い謙遜を表しています。晩年には、自分を「口ごもり、どもる子供、ろくにしゃべれない子供」であると確信していたのです。

2　ホセマリア・エスクリバー・デ・バラゲルの列福式のおかげで、信仰と教会的一致を喜びのうちに表明するためローマ巡礼に来られた、こんなに大勢の信徒と司祭の皆さんとご一緒に、よろこびに満ちた集いをもつことができました。

まず最初に、ラテン・アメリカ諸国及びスペインから荘厳な儀式に参列のためにおいでになった敬愛すべき教会並びに政府の高官や関係者の方々に心からご挨拶申し上げます。

福者ホセマリアの姿は、特権でも、少数の人のためでもなく、すべてのキリスト者に共通の目標であるべき聖性への新たな呼びかけそのものです。事実、洗礼によって神の子となった私たちは、秘跡の助けと信心生活の実践を通して成長させ円熟させるべき聖性の種・恩寵を受けます。そしてそれは、聖霊を愛する人のうちで聖霊が育んでくださる生活の実り及び証として現れるべきものです。こうして人間は、「神の御旨は、汝らの聖たらんことにあり」（1テサロニケ四・三）と聖パウロが言う、あの完全性・充満に達することができるのです。

聖性へのこの呼びかけは福者ホセマリアによって提示され、つねに繰り返し主張されました。今日ここには、この勧めをホセマリアの口から直接に、あるいは著作や目撃者を通して、一度ならず聞かれた方々が大勢おいでになります。日々の生活の具体的な活動と仕事に没頭している私たち一人ひとりは、聖霊の助けを得て、キリスト教的完全性へのこの道を歩むことができます。これこそ福者エスクリバーが語ったことです。「この世のただ中で働くキリスト者は、全ての人間的な活動の中でキリストと語り合いながら、すべてを神と和解させなければならない。」（Conversations「会見録」59）

3　第二バチカン公会議もこの点について、各自は自分が受けた召命に応じて「福音の精神に導かれ、地上の義務を忠実に果さなければならない」と勧めています。（現代世界憲章、四三番）人々がこの義務を怠ると、創造のみわざに協力するよう一人ひとりに要求なさる神の御旨を果さなくなりますが、それだけでなく、連帯という不破のきずなによって私たちと結ばれている隣人を傷つけることにもなります。という訳で、公会議は「多くの人に見られる信仰と日常生活の離反は現代の重大な誤りの一つと考えるべきである」と警告するのです。（同上）

特に今日のキリスト者は、家庭や職業生活、文化と仕事の中心、マスメディア、公的私的生活を、平和と美と全ての人々の間での理解と調和の源である福音的なもろもろの価値で満たすという、新たな福音宣教に協力するよう招かれています。この使徒職は、キリストの教えを述べ伝えるだけでなく、個人と家庭と社会のレベルでの生活の証と模範によって、果されなければなりません。また、すべての福音宣教活動は教区共同体の司

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticanoの転載許可済
© 1992
発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659兵庫県芦屋市船戸町12－6
TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

牧計画に吸い上げられなければなりません。こうして逆に、教区の司牧計画は、聖人や福者たちが二千年にわたって教会の福音宣教の使命を実り豊かにしてきたさまざまのカリスマ（賜）によって、さらに豊かにされるのです。（…）

4 英語を話す国々から来られた方々にご挨拶申し上げます。オプス・デイの創立者がその生涯の大半を過ごしたローマへの巡礼は、皆さんの信仰、そして教会生活とその使命に対する献身をさらに強めることになるでしょう。ローマは、使徒聖ペトロと聖パウロの証の場です。ここローマから聖ペトロの後継者は、キリスト教の三千年目を目前にして、全教会に「新たな福音宣教」という緊急の呼びかけをしています。私は沢山の文書を通して、またあらゆる機会を使って、いまだ人類の贖い主を知らぬ無数の男女に神のお言葉をもたらす仕事で、決定的な役割を果してくださるよう、信徒の皆さんに強く勧めてきました。（信徒の召命と使命・三五番、新しい課題・七一番参照）　新しく福者となった創立者から学び、聖なる熱意に支えられた皆さんが、人間の広範囲にわたる活動の世界で教会の信仰と教えの忠実な証人となり、物惜しみせぬ心で教会の使命に参加して、この福音宣教の事業に挺身してくださいますように。皆さんの才能や能力をフルに発揮し、社会のパン種として、公的私的生活のあらゆるレベルで、人間の超越的な目的に関する真理を言葉と行いで宣言してください。創立者の教えに従って、キリスト教的生活の充満と愛徳の完成への普遍的な召命に寛大に応えてください。そして、もっと人間的な生き方と、もっと正義にかなった公平な社会の基礎を築いてください。（教会憲章、四〇番参照）　この仕事に取り組む皆さんを、神がますます強めてくださいますように。

（一九九二・五・十八）

カルメル山の聖母

新大陸に福音が伝えられて五百年目を迎える今年、アメリカ各地への霊的巡礼を日曜ごとに続けていますが、今回はチリの有名な「マイプーの聖母」教会を訪れることにしましょう。そこは神の恩寵が、高貴にして愛すべきチリの人々の信仰と出会った場所です。

聖堂は首都サンチャゴにほど近い所にあり、チリの女王、守護の聖人「カルメル山の聖母」に献げられています。カルメルの聖母として崇敬される聖なる処女は、チリの歴史を通じて、とりわけ独立運動の盛んになったころ、重要な役割を果しました。

福音宣教のごく初めから、チリは「マリアの国」でした。早くも十六世紀の中頃にカルメルの聖母への奉献の記録が残されています。マイプーで崇敬されている御像はエクアドルのキトからもたらされたもので、聖堂は一八一八年四月五日、チリ独立承認の舞台となりました。聖界と俗界の有力者たちは、独立に際して立てた誓いを果すべく、聖堂の建設に取りかかりました。一九四四年には現在の大バシリカの工事が始まり、一九七四年に基本構造が完成し、今や全チリ人を引きつける霊性の中心地となっています。この聖堂では熱心な司牧活動が繰り広げられています。

一九八七年四月三日、私はカルメルの聖母の栄誉を讃えるため、マイプーへの使徒的巡礼を行いました。その時「教会とチリの全住民を聖母の御心に」ゆだね、「御母の御保護のもと」「平和のうちに和解した国家」を建設することができるよう、特別に祈りを捧げました。

また特に「ラテン・アメリカ大陸」を、常に「信じる人々をキリストのためにお守りになる」聖母の御保護にゆだねました。

新しい福音宣教のかなめとなるのは、イエズス・キリスト御自身とその教えへの忠実です。「救い主のお姿と宣教とを、サント・ドミンゴでの会議の中心に据えなければなりません。ラテン・アメリカの司教方は、イエズス・キリストを讃え、大陸の隅々にまで信仰と主のメッセージを広げるために集まるのです。このようにキリスト論を会議の背景に置くことによって、会議の最初の成果として、救い主・贖い主であるイエズス・キリストの御名をラテン・アメリカの人々の唇と心に留めることができるでしょう。」（司教省ラテン・アメリカ委員会総会にて、九一年六月十四日）

そうです。教会はつねに、十字架にかけられたキリストに一層の注意を向け、明快に、かつ勇気をもって完全無欠な福音のメッセージを同時代の男女に伝えなければなりません。

イエズスへ至る道であるマリア様に、以上の願いを託します。

（一・十六）

ルハンの聖母（アルゼンチン）

新世界への福音宣教五百年を記念して、アメリカ大陸各地の聖堂を訪れる霊的巡礼を続けています。今回は、アルゼンチンの守護の聖人、ルハンの聖母のバシリカを訪ねましょう。

私は一九八二年六月十一日に、「平和の巡礼」としてこの聖堂を訪れました。ブエノスアイレスから六〇キロの、川と同じくルハンと称される町にほど近いこの地は、一六三〇年に人々が無原罪の聖母の御像を崇敬し始めた場所、今世紀の初めにみごとなモダン・ゴシック様式の聖堂が建てられ、アルゼンチンの人々に広く見られる信仰の中心地となった所です。

時と共に、ルハンの聖母教会は熱心な祈りとマリア信心の捧げられる場所、増大する司牧活動の中心、なかんずく無数の信者たちの十字路となっていきました。毎年およそ八百万人と推定される巡礼者たちが、神の御母と出会い、信仰を深めることを願って、ここを訪れます。霊的巡礼者である私たちも、そこに集う大勢の信者たちに加わり、アルゼンチン司教の最近のメッセージ「福音宣教五百年」（意味深いタイトルです）を繰り返しましょう。「福音宣教の星、マリアの仲介を願おう。全てのキリスト信者が、歴史の主、イエズ

説教・講話・書簡等の抄訳

「教会を愛する」（新刊）　福音・神のしもべホセマリア・エスクリバー師の説教のうち、未邦訳のもの三つと、スペイン・ナバラ大学での講演「愛すべき天地」を含む四つの説教を収録。読者の方々が教会への愛に引き込まれ、日々の生活の中でより深く教会を愛し、より効果的に教会のために働いてくだされば本書の目的は達成されるでしょう。　新田壮一郎訳。　定価一〇〇〇円、〒三〇〇円

エスキプラスのキリスト（平和のしるし）

主の過越に向かう旅路である四旬節は、キリストとの出会いに私たちを招き、たえず奮い立たせてくださいます。それは典礼暦年の中でも特別な時期、贖い主の十字架に私たちの注目が集まるときです。

新世界への福音宣教五百年を記念して、アメリカ各地を訪ねる私たちの霊的巡礼は、今回グアテマラの有名なエスキプラスのキリスト聖堂へと向かいます。

エルサルバドルとの国境にほど近いこの地では、中央アメリカの福音宣教の初期から、「十字架にかかったキリスト」の感動的な御像が崇敬されており、「憐れみの主」として知られていました。現地の人々自身が、キリスト教の教義を教わった宣教師にこの御像を求めたのです。公教要理でナザレトのイエズスの受難と死の話を聞いたからでした。

一五九五年に地方の作者の手で作られたこの十字架像は、しばらく各地を転々とした後、一七五九年に完成した大聖堂に移されました。それ以来、その地では驚異の建造物となっているエスキプラスのキリスト聖堂は、信仰と福音宣教の活力の中心となっています。特に四旬節には、この地への巡礼団はグアテマラのみならず周辺の国々からも訪れて、ここを中央アメリカの人々の希望と光明として仰いでいます。

この何年か、エスキプラスは教会の後押しによって、中央アメリカ各国の間に平和をもたらすための会議や交渉の舞台として、象徴的な意味を帯びた場所となりました。

私は、この地の人々のために将来の平和と発展を求めて努力する政府関係者と善意の人々を祝福し、励ましたいと思います。

正義の結実としての平和は、新たな福音宣教が目指す目標の一つです。第四回ラテン・アメリカ司教総会議が、大陸全土に平和の福音を告げ、実現させるための決定打となりますように。

悲しみの処女マリアに願いましょう。ラテン・アメリカと全世界の人々のために、十字架にかけられたキリストのみが与えることのできる、あの平和を取り次いでくださいますように。　（三・八）

教会はキリストの体

教会シリーズ 6

1

「私たちはユダヤ人もギリシャ人も奴隷も自由民も区別なく、一つの体となるために一つの霊によってみな洗礼を受け、そして一つの霊を注がれた。」（1コリント十二・十三）　パウロは教会を体にたとえました。これは新たに示された表象でした。前回のカテケージスで述べた「神の民」という表象は旧約聖書に属するものですが、再び新約聖書において取り上げられ、さらに豊かな意味を与えられました。しかし、第二バチカン公会議でも使われた「キリストの体」という表象は、旧約聖書には示されていません。そこで今回はこの表象を使う聖パウロの手紙をもとに考えてみたいと思います。現代の聖書解釈学者や神学者は、この概念がパウロのものであること、それに続く教父の教えと神学的な伝統、さらに今日の教会を示すにも有効であることを研究し、教皇の教えにも使われています。ピオ十二世は回勅「ミスティチ・コルポリス」（キリストの神秘体）を発表されました。

パウロの手紙には「神秘」という言葉は見つかりません。これは後になって現れます。手紙では、教会を人間の体にたとえて「キリストの体」とだけ表現しています。「体は一つであるが肢体は多く、体の全肢体は多くても体は一つであるが、キリストもそれと同じである。」（1コリント十二・十二）

2

パウロは教会について、一つであることと数多いことの両面を強調しています。「一つの体にはいくつもの肢体があるが、すべての肢体は同じ働きをしていない。それと同じように、私たちは数多いがキリストにおける一つの体であって、おのおのは互いに肢体である。」（ローマ十二・四～五）「神の民」は多数であることを強調し、「キリストの体」は一致の源であるキリストのもとに多数において一つの体を形成していることを強調していると言えるでしょう。「あなたたちはキリストの体であって、各人はその一つの肢体である。」（1コリント十二・二七）「私たちは数多いがキリストにおける一つの体である。」（ローマ十二・五）というわけで「キリストの体」は、キリストと教会の一致、さらに体全体とキリストの一致をもとにした教会の全てのメンバー間の一致を強調しているのです。

3

体は一つの組織体です。その中で各部分、あるいは各組織が協力し合わねばなりません。「体のうちに切れ目がなく、肢体が互いに相助ける」（1コリント十二・二五）ように体は造られています。事実、「体の中で最も弱スから与えられた新世界に、生き生きと関わっていくことができますように。」

同じメッセージの中で、アルゼンチンの司教は五百年前のアメリカ福音宣教の始まりを強調して、このように述べています。「教会は福音宣教を祝しています。それはキリスト・イエズスへの信仰表明です。最初から、新世界の住民たちは燃える愛をもってこの信仰を自分たちの文化に結び付けて表現したのです。教会はまた、宣教事業の五百年記念を祝います。マリア信心に深く根ざして、ラテン・アメリカにキリスト教とカトリックの召し出しをお与えくださった神に感謝しながら。」

「最初の、最も偉大な福音宣教者」キリスト（エバンジェリ・ヌンツィアンディ、七番）の御像のあるサント・ドミンゴで開かれる第四回ラテン・アメリカ司教総会議は、まさにこうした理由で、教会の御母マリアがアメリカ大陸への新たな福音宣教のために演じてくださる、決定的な、すばらしい役割を明らかにすることでしょう。

（…）私たちの歩みを、ルハンの聖母が導き、キリスト信者の使命を再発見できるよう、そばで助けてくださいますように。　ラテン・アメリカ全土に信仰と希望のメッセージを送り続けるあの聖堂から、私たち一人ひとりが四旬節の典礼にこだまする改心への招きを受け取ることができますように。

（三・一二）

不変の教え

く見える肢体はかえって必要である」（1コリント十二・二二）とパウロが教えているように、私たちはキリストの体である教会の中で「互いに肢体」（ローマ十二・五）としての役目を持っています。数多いことによってもそれぞれの働きの違いによっても一致や一体性は破壊されず、また一致や一体性によって数多いことも各自の働きや機能も破壊されることはありません。

4 人間の体に「生物的」調和が必要なように、教会共同体の全てのメンバーにも調和が必要です。「一つの肢体が苦しめばすべての肢体はともに苦しみ、一つの肢体が尊ばれればすべての肢体がともに喜ぶ。」（1コリント十二・二六）

5 教会を表す「キリストの体」という概念が「神の民」を補完します。二通りの類比を使って、一致や一体性と多数であることの二面を表現しているのです。

体の類比は生命の一体性を強調します。教会のメンバーは互いに、キリストに由来する唯一の生命における一致の原理によって結ばれています。「あなたたちの体はキリストの肢体であることを知らないのか。」（1コリント六・十五）これは霊的生命つまり聖霊における生命です。バチカン公会議の教会憲章は次のように述べています。「子は自分の霊を与えることによって、諸国民から呼び集めた自分の兄弟たちを、自分の体として神秘的に構成したのである。」（教会憲章七番）　こうして、キリストは「体のかしらつまり教会のかしら」（コロサイ一・十八）です。体の生命にあずかるためには、かしらに結ばれていなければなりません。すなわち「体全体は神における成長を実現するために、かしらから節々と筋を通じて、栄養と統一を受ける」（コロサイ二・十九）と言われる頭に一致していなければなりません。

6 パウロが伝える「かしら」（教会である体のかしら、キリスト）は、体全体に及ぶ力、最高の力を示しています。神は「万物をその足の下に置き、全てのものの上にキリストを立て、教会のかしらと定められた」（エフェゾ一・二二）と記されているとおりです。かしらであるキリストは体である教会を神の生命で満たされます。「かしらであるキリストによって、すべて愛において成長するだろう。キリストによって、それぞれの肢体の働きに従い、身体全体は自分を養い生かすすべての節々を通じて調和と統一を受け、こうして成長をとげ、愛によって自分を作り上げる」（エフェゾ四・十五～十六）ためなのです。

教会のかしらであるキリストは、体の各部分が結ばれる絆です。（コロサイ二・十九参照）　キリストは霊における成長の原理であり源です。キリストにおいて体全体が成長し、「愛において自分を作り上げます。」（エフェゾ四・十六）

パウロが「愛において…真理のうちに」（エフェゾ四・十五）生きるように勧めるのはこのためです。教会の体とその肢体の霊的な成長は「キリストから」（源から）の成長であり、「キリストへ」（目的へ）の成長です。使徒聖パウロは次のように結んでいます。「真理を宣言し、かしらであるキリストによって、すべて愛において成長するだろう。」（エフェゾ四・十五）

7 さらに、キリストの体である教会が聖体と密接に結びついているということをつけ加えなければなりません。パウロは尋ねています。「私たちが祝する祝聖の杯は、キリストの御血にあずかることではないか。私たちが裂くパンはキリストのお体にあずかることではないか」（1コリント十・十六）と。ここで聖パウロは確かに、パンの外観のもとに聖体の秘跡において受けるキリストの御体のことを話しています。そして彼は答えています。「パンは一つであるから私たちは多数であっても一体である。みな一つのパンにあずかるからである。」（1コリント十・十七）　キリスト御自身であるかしらに霊的に結ばれている教会の全ての肢体は「一つの体」なのです。

キリスト御自身の御体と御血の秘跡である聖体は、教会共同体のすべてのメンバーの一致においてキリストの社会的体である教会を形成しているのです。今日は、聖体についてのすばらしい真理を少少味わうだけで満足しましょう。これについては、再びお話ししたいと思います。

聖母の被昇天

本日の典礼は、マリアに注目せよと呼びかけます。主の卑しいはしためを、栄えある被昇天の秘義に。

この聖なる祝日に、私たちは皆マリアに祈りを捧げます。願わくは皆がこの日を平和と喜びのうちに過すことができますように。

「あなたは、女の中で祝福された方！」

そうです。マリアにおいて契約が成就したから、マリアの処女の胎内で神の子キリストが人となられたからです。

御父の御旨への全面的な承諾によって、マリアは全人類に救いの扉を開きました。

そこで教会は今日、マリアのすばらしい偉大さを宣言し、変らぬ忠実さを讃え、その力強い取りなしを願い求めます。

キリストと永遠の命を共にするマリアの姿に、人類は輝かしい幸福に満ちた未来を見て取ります。それは地上の旅路を終えたあと、全ての人に開かれているものです。マリアの被昇天を見れば、神の似姿として造られ、十字架上で栄光を受けたキリストに贖われた人類の最終目的地が、明らかにわかります。

マリアは最初に贖われ、最初に「栄光に召された」方ですから、マリアにおいて私たちは自らの存在の本質を深く知ることができます。マリアがついておられるなら、旅はたやすく、永遠のゴールへの道も困難ではなくなるでしょう。

心配ごとや悩みの中にある時、日々の仕事を辛く感じる時、この世の無数の誘惑におぼれてしまう時、マリアは自らの模範に従うよう、その光で希望を燃え立たせるよう、私たちを招いてくださいます。神の御はからいで、マリアはすでに私たちの憧れる完全性と幸福に達しているからです。

マリアの体と魂のしみ一つない完全性と、救い主との比類のない一致の状態は、今日再び輝かしい秘義として私たち一人ひとりを照らし、私たちの日々の生活の意味を教え、信仰生活に要求される全てのことを勇敢に受け入れるよう、助けてくれます。

マリアが私たちをご覧になり、私たちのために取りなしてくださるよう祈りましょう。（八・十五）

「教皇様の声」　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月十日発行　■定価　一部八十円　送料実費　■一年予約九百円　送料六百円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替
神戸
3-72393